

突然の大雨が雷を呼び、真つ暗なりピンクの窓を昼間のように照らします。ゴロゴロ、ピカピカ、ドーン。一人で留守番をしていた小学四年生のゆかりは、雷が落ちるたび、耳を両手でふさいだ。お母さんはおばあちゃんのお看病で病院につきっきりだし、中学三年生のお兄ちゃんも、九時まで学習塾。あと二時間は帰ってこない。だんだん心細くなってきた。

何回目かの稲光がしたとき、リビングの外に黒い塊が見えた。ゆかりはこんな嵐の日に？と、自分の目を疑ったが、雷が光るたび、形がはつきり見えるようになってきた。

「あら、鳥だわ」。ゆかりはもっと近くで確かめようと、窓を細く開けた。カーテンが大きく揺れ、

雨粒がゆかりの顔にかかると、「迷っちゃったのかしら」。

「今日雨がすこいから、先生から『早く帰っていい』って言われた。ゆかりは、お兄ちゃんの顔を見るなり、鳥が迷い込んで

きたことを一気に話した。その時だった。「キューチャン、キューチャン」という甲高い声。ゆかりとお兄ちゃんは顔を見合わせた。「この鳥、しゃべる！」。うれしくなった二人は、その声を真似て、「キューチャン、キューチャン」と繰り返すと今度は、こんなことを言い出した。

「ハチオウジシ、ハザマサンチョウメ……、タカハシ……」

「この子、狹間町に住んでいるんだ！」。ゆかりはうれしくなって、大きな声になった。「よし、明日は塾がないから、鳥を連れてこの住所に行ってみよう」。お兄ちゃんは、嬉々として語った。夜遅く帰ってきたお母さんは、鳥を見て驚いたが、空き箱にバスタオルを引いて寝床を作ってくれた。

翌朝、ゆかりは鳥が入った箱を抱え、お兄ちゃんと一緒に出かけた。目指すは、キューチャンが語った住所だ。ゆかりの

家は高尾町だから、地図を片手に京王線に乗る。その家は木立に囲まれた古い家だった。人が住んでいるのだろうか。ゆかりがいぶかしがっていると、鳥が羽をばたばたさせた。やっぱりこの家なんだ。「ごめんください」と、声を張り上げたが、中から何の反応もない。「住所はここだけだ」。

（さし絵・小出 茂）

（終）

おはなし散歩道
夜の訪問者

八王子市 池田美絵

鳥がかわいそうに思えたゆかりはその鳥を両手で抱くと、鳥はおとなしく抱かれた。

「まず、体を拭かなくちゃ」。ゆかりは鳥を部屋の中に入れ、タオルで水滴をふき取った。黒い体に黄色いくちばしの鳥だった。でも、それ以上はどうしようもできず、ゆかりはおかあさんにメールした。でも、おかあさんからの返事はなかった。

それから、三十分ぐらいたっただろうか、お兄ちゃんがびしょびしょになって塾から帰ってきた。

「今日は雨がすこいから、先生から『早く帰っていい』って言われた。ゆかりは、お兄ちゃんの顔を見るなり、鳥が迷い込んで

きたことを一気に話した。その時だった。「キューチャン、キューチャン」という甲高い声。ゆかりとお兄ちゃんは顔を見合わせた。「この鳥、しゃべる！」。うれしくなった二人は、その声を真似て、「キューチャン、キューチャン」と繰り返すと今度は、こんなことを言い出した。

「ハチオウジシ、ハザマサンチョウメ……、タカハシ……」

「この子、狹間町に住んでいるんだ！」。ゆかりはうれしくなって、大きな声になった。「よし、明日は塾がないから、鳥を連れてこの住所に行ってみよう」。お兄ちゃんは、嬉々として語った。夜遅く帰ってきたお母さんは、鳥を見て驚いたが、空き箱にバスタオルを引いて寝床を作ってくれた。

翌朝、ゆかりは鳥が入った箱を抱え、お兄ちゃんと一緒に出かけた。目指すは、キューチャンが語った住所だ。ゆかりの

家は高尾町だから、地図を片手に京王線に乗る。その家は木立に囲まれた古い家だった。人が住んでいるのだろうか。ゆかりがいぶかしがっていると、鳥が羽をばたばたさせた。やっぱりこの家なんだ。「ごめんください」と、声を張り上げたが、中から何の反応もない。「住所はここだけだ」。

お兄ちゃんは不安そうに言ったが、ゆかりは、庭に面した窓が十センチほど開いているのが目に入った。「失礼します」と、窓まで行くと、居間でおじいちゃんが倒れているではないか。「どうかしましたか！」。ゆかりが大声を

出すと、鳥も「キューチャン、キューチャン」とくりかえした。その時、おじいちゃんは、やおら目を覚ました。よかった。

お兄ちゃんは、キューチャンが家に飛んできたことを話した。おじいちゃんは、涙を流して喜び、何度も「ありがとう」と頭を下げた。「寝ないでキューチャンを待っていたから、つい、うとうとしちゃって」。おじいちゃんは頭をかいた。寝ないで待つほど、おじいちゃんはキューチャンのことが可愛いね。ゆかりの心は温かくなった。

（さし絵・小出 茂）

（終）

ご本尊様と御縁を結ぶ
第三十六回 高尾山写経大会

七月二十三日（日）第三十六回高尾山写経大会が有喜閣大広間に於いて開催され、百名を超える方々が参加された。参加者は写経大会の開会式に際し、山内の僧侶と共に般若心経を誦誦し、一文字一文字に心を込めて写経されていた。昼食の後、午後一時から栃木県さくら市の普濟寺住職で、大正大学講師を務め、高尾山報に「法の水茎」を連載中である高橋秀城先生により、「信仰のかたち」と題した講演が行われた。



高橋秀城先生による法話「信仰のかたち」



一文字一文字を大事にして般若心経を写経する

高尾山お施餓鬼大法要

七月十二日 於・山麓不動院



盆迎え火 先師墓地参り

七月十三日

